目指せ！　さいたま考古マスター

君に挑戦！　これなんだ？？

第 5 回

さいたま戦国のおわり編

かいせつ

前編　　いくさと戦国のおわり

問題　その１～　問題　その４

その1　穴があいて、金色の楕円形。

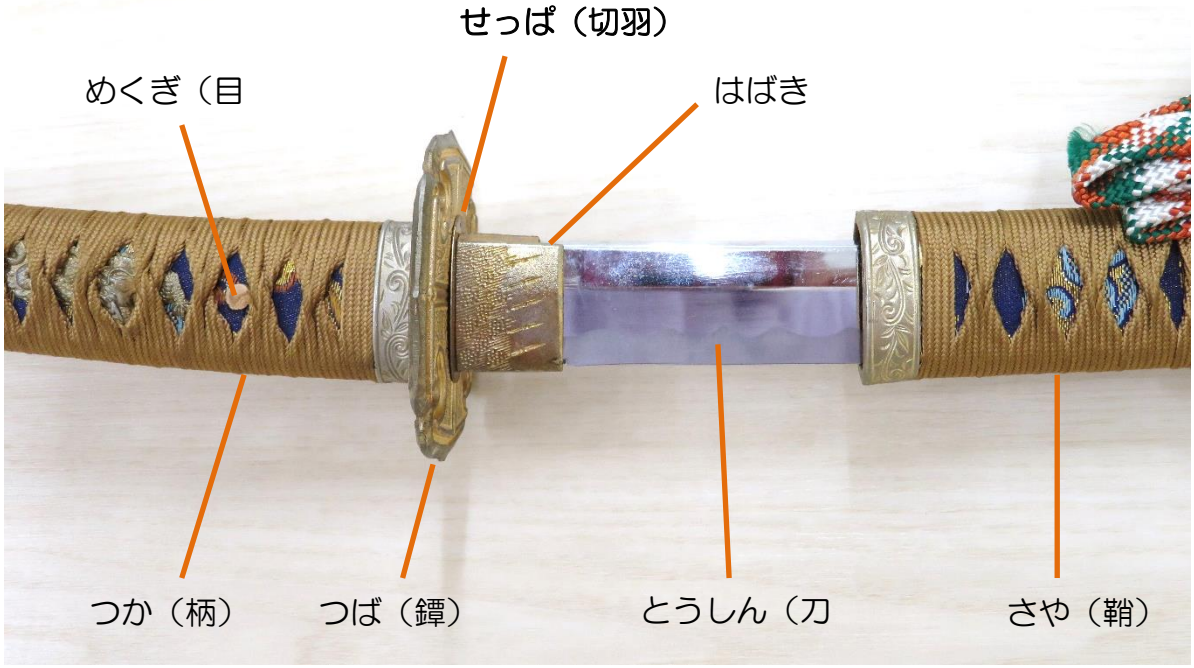
これなんだ？

次の二つの中からえらんでね！

1. 小判(こばん)
越後屋、そなたも悪じゃのう？

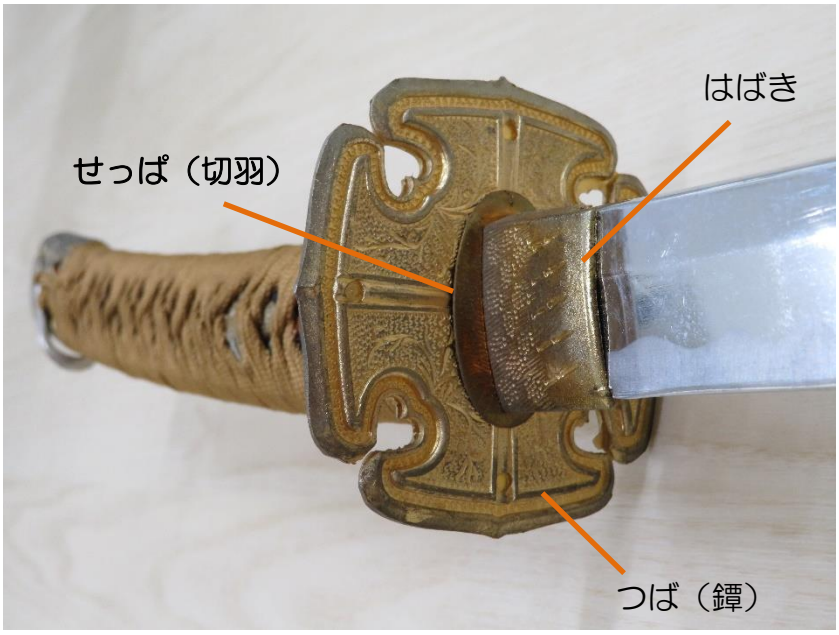
2. 刀の部品
武士の魂（たましい）も黄金色？

ヒント	せっぱつまると・・・。
答　え	2. 刀の部品
解　説	刀はいろんな部品からできているんだ。写真を見ながら説明するよ。 まず、下の写真は、刀のふだんのようす。 つか（柄）は、刀を使うときに手でもつところだよ。 つば（鍔）は、柄と刃（は）のある部分（刀身＝とうしん）とのさかいに付く板で、柄をもつ手を敵の刃から守るんだよ。 さや（鞘）は、刀を使わない時に刀身を収めておくおおいだよ。刃がむき出しのままだと、あぶないね。 今度は、刀をさやから少し抜いたようすだよ（次のページの写真）。刀身があやしいかがやきを見せているね。でも、これは本物の刀ではないんだ。残念！ 刀は、つかから刀身がはずれないことと、さやにおさめてあるときに簡単にさやからはずれないことが大切。そうでないと、刀をふりおろしたらつかしか残っていなか



った、とか、歩いていたら、さやから刀がぬけおちた、なんてことになったりしたらさあ大変！

そんなことにならないように、つかの中にはめ込まれている刀身の続きの部分（そこを「なかご」っていうんだ）には丸い穴があいていて、そこに「めくぎ（目釘）」っていう金具をさして、つかから抜けないようにしてあるんだよ。でも、それだけではまだまだ不十分。つかと刀身をさらにしっかり固定して、つばががたついたりしないようにするために使われるのが、「せっぱ（切羽）」や「はばき」なんだ。「はばき」は、刀身がさやからはずれないようにする、大事な役目もあるよ。



さてさて、問題のものは、この「せっぱ」なんだ。上の写真では「せっぱ」がどんなふうになっているのか、よくわからないね。それで、ちがう角度から見たのが、右の写真。「はばき」と「つば」の間に楕円形（だえんけい）の板があるのがわかるかな？これが「せっぱ」なんだ。

「せっぱ」は、「つば」の両側にあるんだけど、いろんな形で、もようもつけられる「つば」とくらべると、目立たなくて、地味な部品だね。しかも、「つば」と「は

ばき」などにはさまれて・・・。でも、これがあるから、刀がしっかり安定するんだ
よ。それに・・・目立たないけど、刀の威儀（いぎ）をととのえる部品として、しっかり装飾（そうしょく）もされているんだ。問題に出した「せっぱ」が金色にかがやいているのも、そのため。それによく見ると、まわりには細かいきざみの模様がついているんだよ。地味だけど、まさに「チーム　刀」の一員だね。
　あれ？あんまり長く説明してたら、だんだんせっぱつまってきたぞ・・・

　た　て　３．４ｃｍ
　は　ば　２．１ｃｍ
　あつさ　０．１ｃｍ
　刀身あなたて　２．２ｃｍ

■岩槻区・岩槻城跡（いわつきじょうあと）出土
■戦国時代～江戸時代

その2　二つの穴の不思議な形。

これなんだ？

次の二つの中からえらんでね！

1. 船のミニチュア

あれ？でもこれじゃ、沈んじゃう？

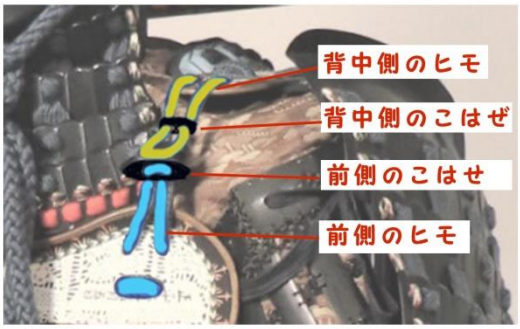
2. よろいの部品

二つの穴にはヒモを通すのかな？

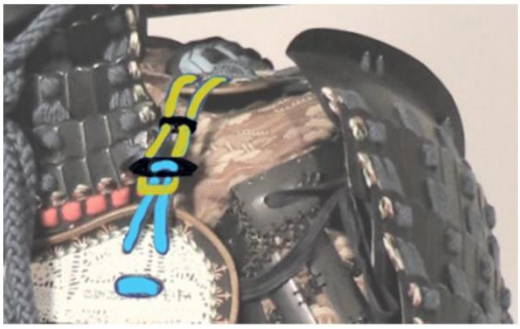
ヒント	日曜夜の歴史ドラマでも、ジュウベエたちが身に着けているものにこれが使われていたよ。
答　え	2. よろいの部品
解　説	よろいもいろんな部品からできていて、それぞれに名前がついているんだ。これもその一つで、「こはぜ」っていうんだ。 右下の写真は、かぶととよろいが一式そろっているところだね。頭を守るためにかぶるのが「かぶと」、体をまもるためにまとうのが「よろい」。胴体のところは、鉄の板などをつなぎあわせて、胴をすっぽりおおうようになっているんだけど、そのままだとずり落ちてしまうんだ。それで、肩のところにヒモをわたして、肩にかけてささえるようになっているんだ。写真に赤い丸をつけたところだよ。 肩のところでわたしたヒモは、むすんだりしばったりするだけだと、動き回っているうちにむすび目がゆるんでしまうこともあるね。戦いの最中によろいがずり落ちてしまったら、一大事！ それで、ヒモをむすんだりするかわりに、金具を使って、ヒモどうしをしっかりつなげるように工夫されている

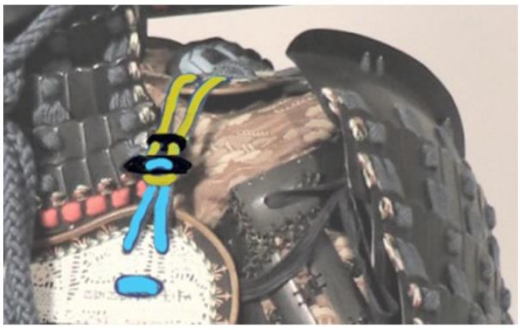
んだよ。その金具が「こはぜ」なんだよ。
　どんなふうに使うのかは、次に図をのせておくね。前側のヒモと背中側のヒモの違いがわかりやすいように、前側を水色、背中側を黄色にしておいたよ。

　ところで、この図でも、前のページのよろいの写真でもそうだけど、「こはぜ」は黒く見えるけど、問題の写真では、緑っぽい色だね。
　どうして色がちがうのかっていうと、問題の「こはぜ」は銅（どう）を多く含む金属で作られているんだけど、長い歳月、土の中に埋まっている間に、銅がさびて緑色っぽくなったんだ。１０円玉も銅でできているから、元の色は１０円玉みたいな色だったはずだよ。
　ただし、よろいの部品として仕上げるときには、さらにひと手間かけているんだ。表面に、「うるし」という黒い塗料（とりょう）をぬるんだよ。だから、見本の写真では、こはぜが黒くなっているんだ。
　それと、問題の「こはぜ」は、ところどころに金色のところがあるんだよ。写真ではよく見えないんだけど、使われていたときには、金箔（きんぱく）でかざられていたんだね。
　なお、問題　その１の見本の刀の写真と、問題　その２の見本のよろいの写真は、与野郷土資料館から提供してもらったんだよ。



はずれている状態


前側のこはぜを背中側のヒモの輪にくぐす


背中側のこはぜを前側によせて、しっかりしめる

　ながさ　３．５ｃｍ
　は　ば　１．０ｃｍ
　あつさ　０．３ｃｍ
　ヒモをとおす穴の直径　０．６～０．６６ｃｍ

■岩槻区・岩槻城跡（いわつきじょうあと）出土
■戦国時代

その3　球。とにかく球。これなんだ？

次の二つの中からえらんでね！

1. 天体もけい
南蛮人（なんばんじん）のプレゼント？

2. 鉄砲玉（てっぽうだま）
当ったら痛そう・・・。

ヒント	種子島（たねがしま）といえば・・・。
答　え	2. 鉄砲玉（てっぽうだま）
解　説	岩槻城跡の戦国時代の終わりころの堀あとから出土した鉄砲玉だよ。 鉄砲は 1543 年（天文 12 年）に、種子島（たねがしま。鹿児島県）にポルトガル人が伝えたともいわれているね。 鉄砲は、またたくまに全国に広がって、戦い方や、城の造り方にも大きく影響したんだ。 岩槻城跡からも鉄砲玉がたくさん出土していて、銅を主な材料にしているものの、鉄のもの、鉛（なまり）のものなんかがあるんだ。問題の鉄砲玉は、銅を主な材料にしているんだよ。だから、「問題　その２」の「こはぜ」と同じように、緑っぽい色をしているんだよ。それと、問題の鉄砲玉は、岩槻城跡から出土する中では、標準的っていうのかな、ふつうの大きさと重さなんだけど、中にはたてが２．８ｃｍ、おもさ１０６ｇをこえるものもあるんだよ。それなんかは、ふつうの鉄砲とはちがう、大型の鉄砲用のものなんだね。 それと、岩槻城跡からは、銅などをとかして加工した道具がたくさん出土しているから、もしかしたら鉄砲玉は城の中で、自前で作っていたのかもしれないね。 直　径　１．３ｃｍ おもさ　７．８ｇ ■岩槻区・岩槻城跡（いわつきじょうあと）出土 ■戦国時代

その4　行く手をさえぎるでっぱり。

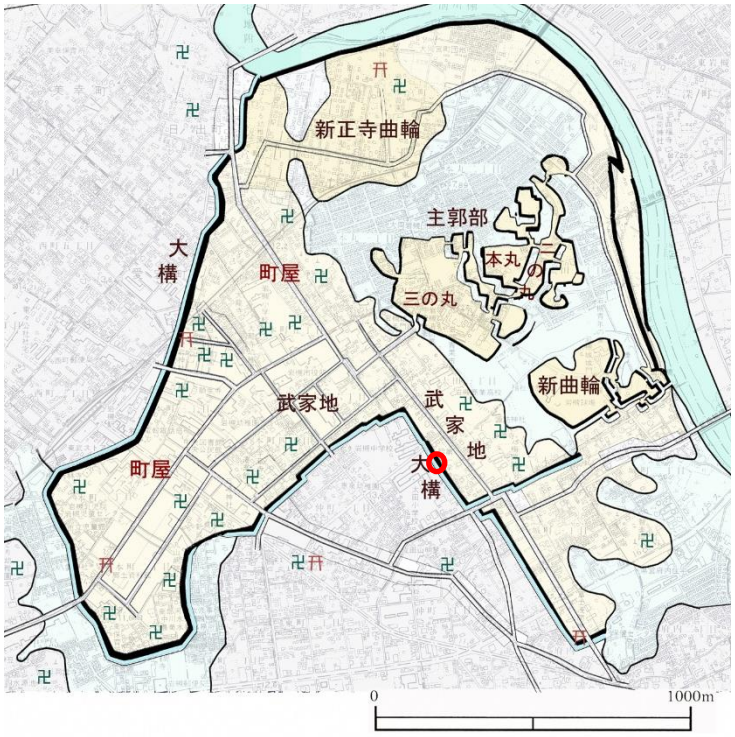
これなんだ？

次の二つの中からえらんでね！

1. こっちとむこうから工事してたら、おたがいにゆずりあって、残ってしまった。
手抜き工事？

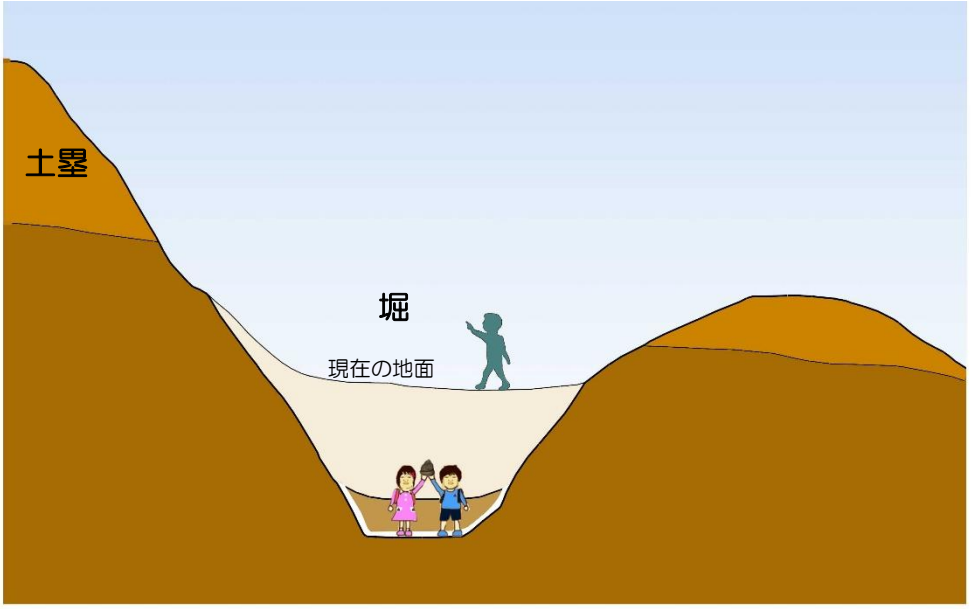
2. 堀底の障害物
これは邪魔だ！

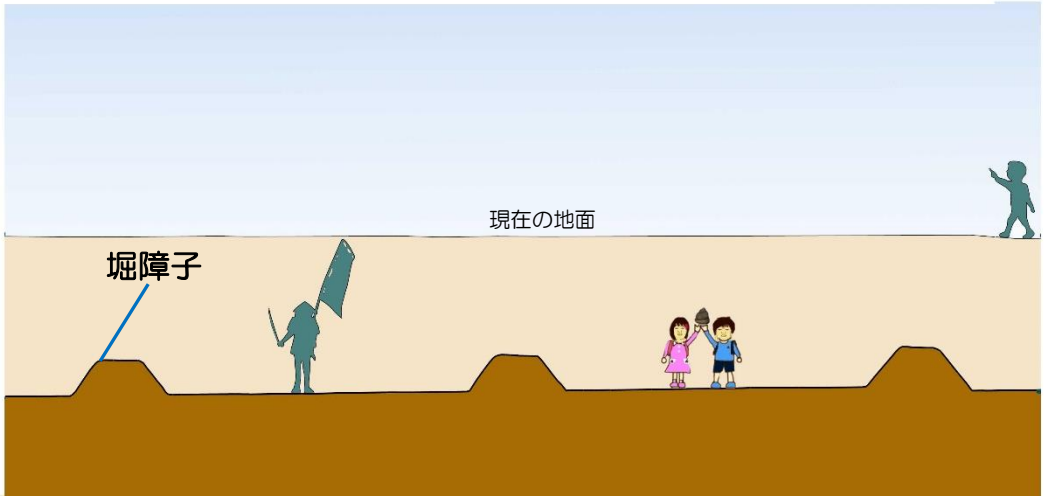
ヒント	刀やヤリを持って、よろいをまとっていたら・・・。
答　え	2. 堀底の障害物
解　説	写真は、岩槻城の堀の底に造られた障害物で、「堀障子（ほりしょうじ）」と呼ばれているものなんだ。手前から奥に向かって堀がのびていて、その堀と直交するように、堀の底を掘り残して、壁を造ってあるんだ。高さは７０ｃｍから８０ｃｍくらいの高さだよ。 本来の堀のはばは、底のところでも数ｍあるはずなんだけど、この発掘調査では、わずか３０ｃｍしか出せなかったんだ。でも、この「堀障子」がみつかったことで、とても重要なことがわかったんだよ。 **見つかった場所**　まず、この「堀障子」がみつかった場所は、右の図で赤丸をつけたところなんだ。ここは、太田小学校や岩槻中学校のすぐ近くのところ。そこに太い黒とうすい水色のところがあるけれど、それは岩槻城の一番外側に造られた防衛線（ぼうえいせん）なんだ。これは、内側（城側）に土塁（どるい）、外側に堀を造って、城と城下町（じょうかまち）のまわりを囲っているんだ。戦国時代の古文書（こもんじ



ょ）では、「大構（おおがまえ）」とか「外構（そとがまえ）」っていう名前で呼ばれているよ。この発掘調査が行われるまでの研究で、豊臣秀吉が関東に攻めて来るのにそなえて、１５８０年代の中ころに造られたと考えられていたんだ。

北条氏が関係　　「堀障子」は、戦国時代から江戸時代はじめ頃の城の堀で見つかる場合が多いんだけど、関東地方では、特に小田原城の北条氏が関係した城でたくさん見つかっているんだ。岩槻城でも、「新曲輪（しんぐるわ）」ってよばれているところの堀で「堀障子」がみつかっていたんだけど、「新曲輪」の堀障子と「大構」の堀障子は大きさや形がそっくり、うりふたつだったんだ。だから、「大構」と「新曲輪」の堀は、同じころに北条氏が関係して造られた可能性が考えられるんだよ。





岩槻城跡（新曲輪・鍛冶曲輪跡）で見つかった堀障子の模式図
※上段は横断面、下段は縦断面

造られた時期　　「大構」では、堀とセットの土塁のところでは、１５９０年の少し前の頃までの地表面が見つかって、そこに土を盛り上げて土塁を造ったこともわかったんだ。とすると、「堀障子」がみつかった堀も、１５９０年の少し前頃に造られたと考えていいね。ちょうどその頃の岩槻城は、北条氏の拠点（きょてん）の城になっていたん

だ。だから、それまでの研究で推測されていたことが、考古学的に裏付けられ、さらに北条氏の技術が導入されていたこともわかったんだ。

堀と土塁のきぼ　　堀の深さは４．３ｍだったこと、土塁の一番下のところの幅は、７．７ｍ以上あったことなどもわかったんだ。堀のはばと土塁の高さは、残念ながらわからなかったんだけど、土塁は堀を掘った土を積み上げる場合が多いから、単純に考えると、堀の幅は７ｍ以上、土塁の高さも４ｍ以上あったと考えていいと思うよ。そうすると、堀の底から土塁の一番上までは８ｍ以上の高さがあったことになるね。刀ややりをもって、よろいを身に着けていたら、矢や鉄砲玉が飛んでくる中でこの高さをよじ登るのは、よういなことではないね。

「堀障子」のはたらき　　さて、この「堀障子」はどんなはたらきをしたのかを説明しておくよ。敵が攻めて来たときには、門などがもうけられた出入口のところに攻撃が集中するけど、出入口は厳重に守りを固めているから、出入口以外のところからも攻撃が行われるんだ。そうすると、まず、敵の兵は、城の内側からの攻撃をかいくぐりながら、堀に近づいて、堀の中に入り込むんだ。敵の兵が堀の外側にいるときには、弓や鉄砲でねらいうちしやすいけど、堀の中に入ってしまうと、堀底を動き回ってなかなかねらいが定まらないことが多いんだよ。そして、敵兵は守りが手薄なところをみつけて、そこから堀と土塁をよじ登って、内側に入り込もうとするんだね。

　そこで必要になったのが、堀に入り込んだ敵兵が動き回れないようにする工夫。堀の底に壁を設けることで、堀の中での動きを制約し、土塁の上からの攻撃をしやすくしたんだ。敵兵がこの壁＝「堀障子」を乗り越えようとしても、刀などをもち、よろいなどを身に着けているから、かんたんには乗り越えられないよね。それで、「堀障子」を乗り越えようとしてもたもたしているところを、上からねらいうち。攻める方も、守る方も、命がけ、城っていうのは、政治の場所でもあったけど、本質は戦いの場だったことを、あらためて実感するなあ。

秀吉にそなえた大工事　　さて、さっきもお話ししたように、「大構」は城下町のまわりもぐるっとかこんでいたから、たいへんな大工事を行ったんだね。「新曲輪」でも大工事が行われていたし、岩槻城の中心部でも大改造の工事が行われていたことがわかっているんだ。北条氏が豊臣秀吉の襲来をどんなに警戒していたかがわかるね。そして、これだけの準備をしたのだから、秀吉が攻めてきても撃退できる、っていう自信もあったと思うよ。

落　城　　でも、１５９０年、実際に秀吉が攻めてくると、北条氏の領地の城のほとんどは、戦わないで降伏してしまったんだ。その中で、岩槻城は、豊臣軍にはげしく抵抗したんだ。５月２０日、豊臣秀吉の家来の浅野長政（あさのながまさ）や徳川家康の家来の連合軍 20,000 人の大軍の総攻撃を受け、その日のうちに「大構」も「新曲輪」も攻め破られたけれど、戦いを続け、二日後の５月２２日に力尽きて落城したんだ。

　この時、攻撃軍の中に、平岩親吉（ひらいわちかよし）や本多忠勝（ほんだただか

つ）っていう、徳川家康の重臣がいたんだけど、平岩親吉の弟は戦死してしまい、本多忠勝の息子は、矢や鉄砲が当たってけがをしたという話が伝わっているよ。戦いの激しさがわかるね。

敗れた岩槻城側はもっと大きな痛手を受けて、城兵の多くが戦死したというよ。敗れた側の記録はあまり残らないんだけど、緑区の神社の神主さんの先祖は、この戦いの時に岩槻城に籠城して戦死した、という話が、江戸時代の記録に残っていたりするんだ。さいたま市内の大部分は岩槻城の領地だったから、市内にいた侍たちは岩槻城で戦った人も多かったと思うよ。

それと、城の中には、城下町の人々（町人、ちょうにん）や、岩槻城と関係の深いお寺のお坊さん（川口市や川島町）なども避難していたんだ。戦国時代の合戦では、略奪（りゃくだつ）や人さらい（遠征軍には奴隷（どれい）商人が同行していることもあったらしいんだ）などが行われる場合が多かったんだ。だから、大構の構築や城の大改修などの大工事を行うと、岩槻城主は領内の安穏（あんのん。平和）のために役立つんだ、ってしきりに言っていたんだ。落城したときに、城の中にたくさんの町人や領内のお寺の人々が避難していたというのは、大構や岩槻城が領内の人々の安全を守る「避難場所」の役割を果たしていたことのあらわれなんだよ。

だけど、大構や岩槻城がどんなに大規模でも、領内の人々すべての避難を受け入れることはできないから、城主のいう「領内の安穏のため」というのは、城主による平和の象徴、見方によってはフィクションだっていうことになるね。

その一方で、合戦のときに城と一体となった大構の中にいたり、城に避難していたりすると、城を攻める側から見れば、たとえ侍ではないとしても、すべて敵方になってしまう。実際、豊臣秀吉は、初めから降伏しないで抵抗した城の者たちは、あとから降伏を申し出ても許してはいけない、と命令していたんだ。でも、岩槻城を攻めた大将は、岩槻城の落城後に生き残った岩槻城兵や避難していた人々の命を助けたんだ。それで大将たちは、豊臣秀吉は厳しく非難されたんだよ（結果的には、全員が命を助けられました）。

大きな時代の変わり目、しかも強大な天下人の大軍の襲来を迎える中で、人々がどのようにその時を迎え、その時どのように行動したのか。まるでゲームのように合戦に勝った、敗けた、だけではすまない、ぎりぎりの選択を一人ひとりがせまられたんだね。

■岩槻区・岩槻城大構跡（いわつきじょうおおがまえあと）の堀と「堀障子」
■戦国時代